
彼 の 話

Akira*

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼の話

【Nコード】

N8701R

【作者名】

Akira*

【あらすじ】

或る日亡くなった一人の青年。

彼の死の一年後、不可思議な文書が見つかる。

果たして貴方は此の謎を解く事が出来るでしょうか・・・？

冷たい、冷たい。僕は其れが吹く度に段々と体温を奪われて行く。でも僕は気にしない。何故なら其れと此れとは関係無いのだ。

僕の体温が奪われようと何だろうと、君は必ずやって来るのだから……絶対に。

彼の話

——或る日、一人の病弱な青年が息を引き取った。

初めはどれ程苦しかっただろうと哀れんだのだが、その顔は恐ろしい程幸せそうであつた。

「何てこつた」、と其の医者が顔を顰めた位だ。

彼の死の一年後、文書が見つかった。きっと誰も解読出来ないで在ろう程、不可思議な文書。

恐らく彼が書いたもので在るのだろうが、さっぱり意味が分からない。

なので、私は此处に書き記しておこうと思う。

推理が得意な者達に、是非此の内容を解読して頂きたいものである。

（以下、文書より現代文に直し抜粋）

僕は如何して此处に居るのだろう。

君は如何して此処に居ないのだろう。

先刻から吹雪いている雪は、僕の体を見事にすり抜ける。もう害は無い。

然し不思議な事がある。

僕は君を探している。ずっとずっと探しているのに、何をしても見つからないのだ。

皆が皆、君の存在が「無い」と云うのである。

おかしい。皆、可笑しい。

僕は、見たのだ。はつきりと。“君”がやって来た瞬間を。“君”の美しさを。

でも僕は君の手を握る事が出来なかった・・・周りの人は「それで良い」と云っていたが。

“あの時”の君はとても奇麗で、其れと同時にとても恐ろしくて、僕は動く事が出来ずに居た。

あれは今でもよく分からね。

“あの時”、如何して僕は君に一番近い場所に居たのか。

“あの時”、如何して僕は君と出逢う様な事をしたのか。

“あの時”、如何して僕は君の事を見る事が出来たのか。

“あの時”、如何して僕は君が浮いてる様に見えたのか。

“あの時”、――・・・そうだ、思い出した。

僕は苦しかったのだ。

例えば、誰も僕の話の聞いてくれなかったとする。

“今迄の僕”はずっと、「己が我儘だからなんだ」と思い続けてきた―――が、違った。

今になって思い返してみれば、僕は何も発言して居ないのだ。只“其処に居ただけ”であつたのだ。
なのに、己の云い訳以上の「己が全て悪い」に成り変わっていた。
意味が分からぬ。

平たく云つてしまえば、僕の周りは我儘だらけで在り、此の例えで見ると此の内容は根本的に間違いだ。

僕の所為で相手が「聞いてくれなかった」、のでは無い。
相手が僕の話「聞かなかった」、という方が正しかったのだ。

其れが分かつた時、僕は段々と、壊れて行つた。

今迄「己が悪い」と思い続けてきたものが一瞬にして水の泡の様に消え、跡形も無くなつたのだ。

如何生きて行つたら良いのか己でも分からなくなつてしまつたのだ。
然も吹雪は僕を消し去るが如く吹き上がるばかりであつた。

其の様な状態が三年程続き、ついに僕は耐え切れなくなつた。
相変わらず吹雪が強く吹き上がつていた頃の事である。

元々僕は、己でも不思議に思う位同じ学年の吹雪を発生させる人々には一目置かれて居た存在であつた。

だから僕がどんどん変わつて行く姿を其の人々は客観的に見て居たに違い無い。

・・・其れがより一層僕を苛立たせたのは云うまでも無いのだが。

此の頃の事で、今の僕が最も申し訳無いと思つてゐる事が在る。

それは、吹雪を発生させる人々の事を余りにも子供扱いし過ぎた事だ。

彼等は僕と同じ年で在つたのだから、多少ずれが在ろうと僕の同級

生で在る事には変わりはない訳だ。

然し、申し訳無いとしても、吹雪を発生させて居たと云う事で僕の中では完全に相殺された。

当たり前じゃないか。彼等は僕に何年間も吹雪を送り続けて居たのだから。

相殺されて当たり前だ。寧ろ僕としては相殺されただけ有り難いと思つて欲しいものだ。

其れ位其の頃の僕は精神的に病んでしまつた。

—— “だから、壊した。人格を。心を。僕の周りに在つた存在と云う名の物全てを——。”

此れは当時の文章である。文学者だとは勘違いしないで欲しい。

此れだけ聞くと、まるで僕が人を殺した様に思える。が、まさかそんな事は流石の僕でもない。

今となつては出来なかつたのが非常に悔しい話だ。

残念な事に、精々彼等の家に悪戯をする位しか子供の僕には出来なかつた。

勿論子供で在る故、大人達には叱られる。

只、子供でこんな事を考える方が異常だと理解して頂ければ幸いである。

・・・そんな事を書いて居る今の私も、充分子供だが。

そつ、とにかく僕は周り比べると常に異常な子供であつた。

平たく云つてしまえば、年齢に相応して居ない物が好きな子供。

だからと云つて大人が好む物が好きであつた訳では無い。・・・寧ろ気持ち悪い位だ。

何故あそこまで執着出来るのか今でもよく分からぬ。

さて、僕が“君”に出逢った話に戻るが――・・・未だ信じて貰って居ないのが事実である。
何せ元が“異常な少年”として名が知れ渡っていたので、当たり前のような気がしなくも無い。

“君”には僕が死ぬ際にまた出逢えるとは思うが、果たして其れ迄我慢が出来るか如何かが問題である。

だからもしも僕が自害していたのなら、きっと其れは我慢が出来なかった事に過ぎないのだ。

そしてもしも僕が自害せずして死んだのなら、きっと僕は幸せな顔をして居るだろう。

何故なら、“君”と自然に逢うまで我慢出来た、と云う事なのだから。

こう書いてしまうと、残念ながら未だ僕の頭の中は幼いと見える・

・此れは大正解だ。

だからどうか、僕が“君”と自然に逢えたなら、此の文章を読んで欲しい。

きっと誰にも解読は出来ますまい。

もしも此れ――“君”が誰か――が解けたなら、是非とも僕の墓前に立ち、名を名乗って欲しい。

此れが僕の、たった一つの遺言で在る。

（後書き）

分かりましたらお気軽に感想へ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8701r/>

彼の話

2011年10月7日15時21分発行